

個の尊厳重視とエゴイズム — 憲法第13条を再考せよ

個を絶対的なものとみなし、挙げ句は憲法とは、国家権力の行使を制約して、個としての国民の権利・自由を守るためのものだといわんばかりが、日本の現憲法です。この個を絶対視する観念こそが、実に醜いエゴイズムを日本のそこそこに蔓延させている元凶なのではないかと私は考えます。一つの話から考えてみましょう。

東日本大震災発生直後から、奉職する大学の学生達ともども、私も救援ボランティア活動のために岩手県釜石市や宮城県石巻市に何度も足を運んでいます。この地は、現在なお無惨としかいいようのない瓦礫の山です。瓦礫が町のそこそこに積み上げられて、これがわずかに人の手の入ったところ、それ以外はまったくの荒涼です。震災後、もう三年近くも経ようというのにです。瓦礫の広域処理が進んでいないからです。

瓦礫の広域処理は、全国に広がる地方自治体に巣くう反対勢力によって手厳しく阻まれてきました。被災地の瓦礫処理は、日本人の醜悪なエゴイズムを露呈させて、私は暗然たる思いであります。

政治家やジャーナリズムは、安全といえれば安心と、続けていきます。安全はいいでしょう。一社会には守らなければならない安全基準(リスクミニマム)がありますし、また、なければなりません。しかし、安心というのは、まぎれもなくエゴイズムです。安心は、これを求めつづけければ、「絶対安心」という、人生にとってはおおよそありえないものへの渴望に人々を誘ってしまいます。人々は絶対安心を人間に生得的に与えられた権利であるかのように主張して倦むことがないのです。手にすることが不可能な観念を追求しつづけければ、ついには行き場を失って自己閉塞の心理に人々を閉じ込めるに違いありません。

個としての自分の生命が脅かされなければいい。他の同胞のことなどかまってはられないという「生命至上主義」という信仰に、日本人ははまり込んでしまったかのようです。いや、生命という言葉を使うほど高雅な信仰でもあるまい。むしろ「個体至上主義」といった方がいいのでしょうか。生命といえ、今ここに生きて在る人間だけのものではありません。われわれを今ここに在らしめたものは、父母であり祖父母であり曾祖父母であり祖先です。また、われわれ

が今ここに在るのは、子供、孫、曾孫へと生命を未来に向けて継承していくためです。生命というなら、過去と現在、現在と未来とを繋ぐ生命現象の全体を語るものでなければ、いささかの価値もないのではないのでしょうか。

ポピュリズム、つまりは政治が迎合しているのは、現存する人間の個体に過ぎません。歴史もなければ未来へと繋がる意思もみえない、生物学的な意味でのただの個体であります。

個人の尊厳という思想は、現実には、日本人に手ひどいエゴイズムを帰結しているのではないのでしょうか。憲法13条は「すべて国民は、個人として尊重される。生命、自由及び幸福追求に対する国民の権利については、公共の福祉に反しない限り、立法その他の国政の上で、最大の尊重を必要とする」というものです。これでいいのでしょうか。

日本安全保障・危機管理学会

会長
渡辺 利夫

